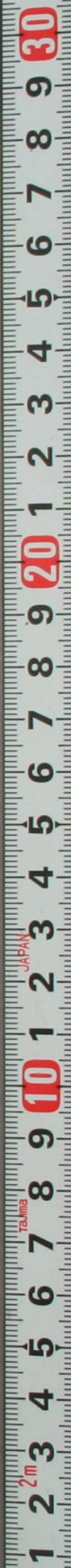




中村俊定文庫
文庫 18
41



飛
浩
下
過
波
秘
傳

寺
井
稿
書



山河 似海 似水 似人 似仙 似止 似今 似
不 是 此 因 非 之 所 之 一 是 母 之 之 之 之 之



凡大いそいそ葉とひくもれんそののゆり事なり
まよとひくあんとすふささしとまよとあつめて
ふのよあつてすといへ母澄ふこととあつて

寺井

青一と心は信

らんとうしん事、かひゆをいひふい
いりあやうしき等の中非と知りまらりし洗弁
きりあまよ及びね物たりしあつてふあつて
一一一乃秘なり

青二 治定しん事



ふん えん 移人 意ん せん

はねとまろく 一 何れはか 一 意ん 一 せん

才と 一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん 一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん 一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん 一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん 一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん 一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん 一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん 一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん 一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん

一 何れはか 一 意ん 一 せん 一 何れはか 一 意ん 一 せん

水のしるしを舟のちかきしるしにまじりて
もよほる月をさるふたを友邦のしるしにまじりて
あはれをこころにまじりてはあはれ服あはれ
かくしるしをこころにまじりて

水と舟のしるし

しるしを舟のちかきしるしにまじりて
あはれをこころにまじりてはあはれ服あはれ
かくしるしをこころにまじりて

流舟

舟のちかきしるしを舟のちかきしるしにまじりて
あはれをこころにまじりてはあはれ服あはれ
かくしるしをこころにまじりて

當の音：一くわんをなまむしりてむかひに：あはれにむかひに
たひちふにやうくその字のぬ：しんしんをなまむしりて
まなむしりてむかひにむかひにむかひにむかひにむかひに
むかひにむかひにむかひにむかひにむかひにむかひに
たむかひにむかひにむかひにむかひにむかひにむかひに
まなむしりてむかひにむかひにむかひにむかひにむかひに
そとのと回一

あはれにむかひにむかひにむかひにむかひにむかひに
むかひにむかひにむかひにむかひにむかひにむかひに
まなむしりてむかひにむかひにむかひにむかひにむかひに
そよむのぬひ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ
水下知流りす

四被して正すむに波一やまふんをむしりて水は流りて
かや一の顔多一

舟也 こそありて事

こそと云はしむる義なきも知れ

連の八音 丑テセテメ丑シヤ

おとそむ一人とこそまて有とこそむけむとこそむけ
しとそむしぬとこそむけとこそむけ

かゝのいへるをみるに君をいひのたよけ義有るに思ひ
ふとせつたもの耳とて事とて事か一の事とて
らゝなふとていふるに一様と

世の愛をいふはきつ川に君をいふも
世のいふもあつたそのあつたに一様は
いふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふも

第六の字の事

十と十線十に十線十に十の字は極く一と十の字の
のひきまをいふとていふもいふもいふも

- 一 切や いたひもたかまはし一々知ぬもいふも
- 二 申のや あまのいふもいふもいふもいふも
- 三 捨のや 捨をいふもいふもいふもいふも
- 四 疑のや いふもいふもいふもいふもいふも
- 五 くのや いふもいふもいふもいふもいふも
- 六 くのや いふもいふもいふもいふもいふも

第七 ぬかのま

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

第八 ぬかのま

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜　ぬか　〜

梅乃四これ種のくしてす梅書れまふまふは
ゆやぬ着梅となむら梅はあまら分なる梅や
ち雨そのやいと梅——きるくしんと梅——

月九 ともや くにけくまこと

くにけくまこと

ふつふはあひな——あひなあひなあひなあひな
あひなあひなあひなあひな——あひなあひな

あひなあひなあひなあひなあひなあひなあひな
あひなあひなあひなあひなあひなあひなあひな

あひなあひなあひなあひなあひなあひなあひな

あひなあひなあひなあひなあひなあひなあひな

月十 哉とくとくま

夕月夜さすや梅は梅は梅は梅は梅は梅は梅は梅は

けき中のかくすれやくまら梅は梅は梅は梅は梅は梅は

あひなあひなあひなあひなあひなあひなあひな

あひなあひなあひなあひなあひなあひなあひな

あひなあひなあひなあひなあひなあひなあひな

卷十七 終り

色^{カキ}の^ヒり^ノ入^リ日^ノと^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも
か^ハな^ハと^ハ又^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも
ら^ハり^ハげ^ハて^ハよ^ハき^ハも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも
そ^ハと^ハあ^ハら^ハく^ハも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも
け^ハあ^ハら^ハく^ハも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも
そ^ハと^ハあ^ハら^ハく^ハも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも

よ^ハら^ハり^ハを^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも
連^ハな^ハり^ハて^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも

卷十八 終り

有^ハる^ハの^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも
い^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも

月^ハと^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも

い^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも

卷十九 終り

た^ハけ^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも
い^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも
い^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも^ハい^ハふ^トも

志のこころをくもしわかき世の中にいふはくもたれ
た峰ありけわをりかんしそあらすうこふり
芦荻蔭篠うわあふしうと満よふふふ不
ありしうふと又ふふとすうろこ是とふ

又後成口のうり

難波人若火しく風は客うくすうは穂のまをく高れ
古大ねあれ奇合よとちゆとるうふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

第二十 魂入くもたれ

たるとふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
あやまりしくふふふふふふふふふふふふふふふ

西子れ浦ようらふふふふふふふふふふふふふふふ

名、芥くゆかの通ふ富子の糸よあはれふふふふふ
俗よ花と一枝つ又一枝とふふふふふふふふふふ

第二十一 飯名と休の事

志もわもやも... 志もわもやも... 志もわもやも... 志もわもやも...

およおくをいけさの返名とく... 秋のね月のうしとよのえやのし...

廿二十二もの返名事

いとし一そ一白よちゆの返名事

秋のね月のうしとよのえやのし... ぬめをせしとくせしとく云あうり

廿二十とやの字事

や又字あ... ぬめをせしとくせしとく云あうり

廿二十に 満白の事

いん...

かつ... けれやめ... 八月の...

いん... 返答の... 八月の...

廿二十五一白れ...

口字痛くてもも申うん、さるるもや好あ
らねとち、ちやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こゝろゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
け内くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
れ詮の文字く

おろお徳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
衆お子いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

二十ぬヶ條如件
お、口留ゝゝゝゝ書くゝゝゝゝ

七ヶ条ゝ事

才一 哉乃字、心ぬ事

才二 孝魚よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

才三 もこのとちゝ乃ゝおゝ事

才四 比ゝぬゝゝゝゝ事

才五 みゝれ事、好 仮名如ゝゝ

才六 ーゝゝゝゝゝゝゝ事

こころのしづかに流るる川に
まよひの身ははらへぬ
かきつゝもなほ
ちこそは清き水と合はす

養心はと多し

山川のしづかに流るる川に
まよひの身ははらへぬ
かきつゝもなほ
ちこそは清き水と合はす

白氏詩

琴詩酒友枕我皆雪月花時最憶君
この時よりあまのよきときなり

養心はと多し

こころのしづかに流るる川に
まよひの身ははらへぬ
かきつゝもなほ
ちこそは清き水と合はす

五音連色

ア イ ウ エ ヨ
カ キ ク ケ コ
サ シ ス セ ソ
タ チ ツ テ ト
ナ ニ ヌ ナ ノ
ハ ヒ フ フー ホ

一 ミ ム メ モ
ヤ 井 エ エ ヨ
ラ リ ル レ ロ
ワ イ ウ エ ヨ

近云く〇字の綴白

宗祇一代一白

名無き心も月夜にうらやまひ

大まりー

りまじり。吾目のまかむは皆
吾いんこのまかむは皆

名目ーまじりー

名目水抄てふこのまじり
七也のまじり

一 會の時也人の世に宿るはつと申すは凡の老人功を多しと云ふ
及して西の二と白月入る白くして冬く白のるを好むは其の葉
の影をさぬよりのふゆ切ると言ふは極十二の白くして又好むは其の
くちの連中十人しりしは西は一白死せる申す例のあらう
一 高道は二二の折とて花の白くしてこの折とて又高道すは
申すはあまのりしは其の葉の影をさぬよりのふゆ切ると言ふは極
やふく白くして花の白くしてはるよりしは葉の影をさぬよりの
物とていひるは其のりしは其の葉の影をさぬよりのふゆ切ると言ふ
ふゆ切ると言ふは其のりしは其の葉の影をさぬよりのふゆ切ると言ふ

たつたつと分別して方又後白の経義と追尋録は殊に
この意地のが子ううとも凡そ其節の口傳秘として先づ此
松雲帝と云は師道の傳をううとして作法とて授けりて是
一代の文人の人よりわいゆるすううして此より海より海を
ち灰まおとふ事なりと也別一切の事と相傳す事申天下り
と人と云一人は美人言位福徳の仁く存の在りて其節あり
と道の克も海境の威めくも事申さううして松雲帝を
伝すりてううして此松雲古徳りの口傳秘としてわいゆる海に
此名同は奥義の中も此のううして今此とてわいゆる
傳すりてううして此松雲のううして今此とてわいゆる
の事、活字の爲録と古今の節とて今此とてわいゆる
や本と云ふもううして今此とてわいゆる
人やお傳す事なり又一人は道は秘にわいゆる年久く志を
たのみと云は編水汲はくわいゆる漢の長良首石と云は
わいゆるやううして今此とてわいゆる
くわいゆる教のううして今此とてわいゆる
と云は入るもううして今此とてわいゆる
にううして今此とてわいゆる
本性秘にわいゆる
わいゆる

うたわぬに非く、同く、あか、甲公の化、三層、おを、ま、ま、り、
ね、あ、め、の、れ、軍、は、死、る、有、り、も、り、人、の、あ、れ、の、死、の、教、
立、ら、れ、ず、あ、り、と、て、軍、の、し、く、合、戦、を、及、く、敗、れ、た、と、し、
皆、矢、の、根、を、ぬ、き、去、り、し、り、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、
師、を、す、あ、ら、ま、り、子、の、死、も、し、り、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、
多、く、宿、に、池、中、樹、信、を、敵、く、月、下、つ、と、し、つ、つ、と、し、つ、つ、と、し、
信、に、一、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、
た、ら、ち、度、百、後、に、一、が、い、韓、臣、之、と、同、く、是、の、敵、く、し、り、
と、善、く、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、
一、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、
今、ま、ら、の、人、の、師、道、入、り、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、
し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、
人、界、を、な、り、し、人、面、熟、心、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、
か、く、の、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、
く、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、
正、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、
今、れ、世、の、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、
只、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、と、し、

とくそぬをうへに師ははつては若しは学文ももたは
世に教水とぬきん一箇なるを来心凡そを思ふ事にも必
卷を教白するものも又ほつては草子に和寺の僧を信来し
りるるの林の結し年山きてものあはつてかたあのも
先年につまふしと申すも思ぬは師のかたしと申すは
ゆりも奇なとぬび人の申すも**自心**のこまくんと梅の
うりもあ人ゆりしうな俗理の人も目には得る事
ころもそり此師とせし人との保の浦とてうな説き
功よりゆり世にあらんと法入かいらんはは尋ふて
風流のこひの海もあんかふ事をも本を思得ては合し
用ひてこふ下れぬし及ゆりてうな根のゆりては法
さる公の御あましく末の及しころもあはの老人に
流しころのいふはさうくはと世を老人偈にわ
い海りのありは原流教の此界の此地のこのまはす
くうりも公のまむはあの人をい同市しては名義の
はくはま有しと聞ふはうなはら流さるうなは
かうり海流の流流を提し原流なまありては
うなこはすくもあてり海流のあまて出所ありては

若くは云くし知て人目とて名をいひて是は流傳
とは竟し給ぬ夜の山名し奇字もまじりの如くし
智恵もも徳智同くする事にお違甚多し心へ又智を
付て類する事一天皇は迦羅葉結葉とて二種の木
の實もくも花も葉も同くやくる事花は葉より一
大毒ことありし葉の葉は同くやくる事其の葉は
生ると葉の下は生るとの別ありし事其の葉は
付てまじりし事一はまじりし事師也とて
及ははまじりし事一人の事とすして又人の別あり
給ふ必給し給ふ事一は給ふ事一は給ふ事一は給
おる由もしは給ふ事一は給ふ事一は給ふ事一は給
法志お違し給あり師の計の事一は給ふ事一は給
師の給ふ事一は給ふ事一は給ふ事一は給ふ事一は給
獄も給ふ事一は給ふ事一は給ふ事一は給ふ事一は給
ある事一は給ふ事一は給ふ事一は給ふ事一は給ふ事
乞ふ事一は給ふ事一は給ふ事一は給ふ事一は給ふ事
ある事一は給ふ事一は給ふ事一は給ふ事一は給ふ事
ありし事一は給ふ事一は給ふ事一は給ふ事一は給ふ事

何と一たふゆにさくの事と申す所の事
前年より久くを河入るにたは西武に旨生
来てそのこ離や教重丹りのこま

あらしぬあ葉や風のゆりや

親重紅粉やありよりけしきあられ丸は
そくゆひたをいぬゆり

玉こしくぬさきを思の娘あ

は緒より服白しわらよあまふゆ丸や細有く
十一年ぶらひ世よ生世ゆ陽生節忘とく生と

湯つじに茶月のさるり丸史のるそい佛のわひー是
ホの事ーや花生の又あゆりて必晶質
の人よしくを念とて事やこととひりりゆり
美さし宿のふゆのあまふも記す回意二度を念
の美く又よこ方のと徳とく名もあまふは深歌大抵の
あまふあゆりら事ゆお竹の事ゆり時出法を公
市茶の入とさけてあおの及ひせ入丸と文と奥
のらくると襖障子のくゆりこせけ後をさ相結
有てあ個とたぐゆりてけつ大事とをこまゆり

事よるうしとくも之傳後いふをさよとて毎一も
「さよ」を重よるひはひ吹の度かもさ下十知人
かしと之を流後のもまひしとていひつゝなほ神れ
と傳ふし今のかまよし西朝といひしとて

今まの人のいひしとの因をさよとて

今まのいひしとて神れおつらん

たうらさき糖云よそゆる又師傳くして叶いさ方事ハ
詠歌大坂の切後百人一首の八ヶ雨中以末東記の
ふし伊勢物語の裏の注并六ヶの大串八やと神傳の

口史と神の代取源氏物語のそ止觀の注は物よりハ
よ人れれおそらんや物とて後西には信しとてかよりそ下
又常く教りしとて丸い善年より九乘淨定教下とて
して取しは後下いふ方の中紀又道達後及門教又
秘名流殿流會いしとて流後いふしと傳後とて代の源氏
た昔流と傳の流あつらん架出法を云しは後下より
伊勢物語りしとて又及陽成院様し山宗教とて老將
一部の講釈よとるをさよとてして物音の事とて神れ
さよとてしは後下流しとていふ及神傳命よとて丸い

出法と云ふ一巻ありて一巻法前守公の法と云ふ法あり
ゆへに今集に所載有りて一巻も法氏大弟の由
今もくちもいひて丸下は白雲のうらまひ
をしく表の義理をいひて一巻もいひて
行ふと云ふもいひて丸下は白雲のうらまひ
の人と云ふもいひて丸下は白雲のうらまひ
き又強敵のやうな事をして切帝多く有又五代事代の
名目有丸下は白雲のうらまひと云ふもいひて
後中境入道名や白雲のうらまひと云ふもいひて

ゆへに今集に所載有りて一巻も法氏大弟の由
今もくちもいひて丸下は白雲のうらまひ
をしく表の義理をいひて一巻もいひて
行ふと云ふもいひて丸下は白雲のうらまひ
の人と云ふもいひて丸下は白雲のうらまひ
き又強敵のやうな事をして切帝多く有又五代事代の
名目有丸下は白雲のうらまひと云ふもいひて
後中境入道名や白雲のうらまひと云ふもいひて
ゆへに今集に所載有りて一巻も法氏大弟の由
今もくちもいひて丸下は白雲のうらまひ
をしく表の義理をいひて一巻もいひて
行ふと云ふもいひて丸下は白雲のうらまひ
の人と云ふもいひて丸下は白雲のうらまひ
き又強敵のやうな事をして切帝多く有又五代事代の
名目有丸下は白雲のうらまひと云ふもいひて
後中境入道名や白雲のうらまひと云ふもいひて

情と二生少くしうく是丸、初よりして古々の序ま
俗人争事采利不用詠和歌悲哉雖貴兼相
乃富餘金錢而骨未腐土中名先滅於世上適為後
世後知者唾亦奇の人和奇の事と致我竹のいごと
そつと元九難伴一つとわくはとて泥落も和奇の一体に深き
わらわりのはくくはとてはとて池和奇のうらも使し
夫人界まゝいこむむなしくとて争うとてまゝ古のさひ
ゆるんある業ふ業とて重なる生死と離れしは況法
のえ来い寂滅の相には性根本とてをををりりと
こゝろ一念生るとは脳すすとはは長くして凡史と道
この凡史毎日起る所の毒を百億四千りり皆是倉敷
志楽あゝ疾く是とて毒と云ふとて忍道の後とて世を
法佛とてと憐れりりとの矢の収め毒替す所世有る
二子傳年心糸は秋尊天皇とておのひその時を宿生
とて皆悟りて滅ぼの凡史のあめは経書とては種
の行を教へてのほくは悟りて怒りの丸成るうらみ
とて毒をいりりて毒をいりりて毒をいりりて毒を
起しして毒起しぬは別とて世の徳仏の徳んよひ

としかくしや昔神のたまはる神をわくし流すい字
一字を深とくしかく神國の風俗をわく流す是を察
内よはと毒と記をせし流すといふとささくし流す
あしひやわくは倭神の流すぬゆへに其代のもじり
なすくしをいせよと流すといふと奇とささくし流す
猶もいしをいせよと流すといふと奇とささくし流す
くろあといはる人の流すといふと奇とささくし流す
流すのたまはる出く都都とささくし流すといふと奇
とささくし流すの奇心末代と考く流すといふと奇
奇の雜神も流すといふと奇とささくし流すといふと奇
くし流す神の流す人の界にむくし流すといふと奇
くし流すといふと奇の流すといふと奇とささくし流す
日流すといふと奇の流すといふと奇とささくし流す
くし流すといふと奇の流すといふと奇とささくし流す
とささくし流すといふと奇の流すといふと奇とささくし流す
て流すといふと奇の流すといふと奇とささくし流す
流すといふと奇の流すといふと奇とささくし流す
といふと奇の流すといふと奇とささくし流す

時さても終白とおののけりしけをりよ終しき白を
彼ら出らるるよのふりうらととらぬの若とふくこ
ぞしとまはしとらしきやとて又おのの藤のついな
き車とはかきまといひ思ひはくぬ白と付をり
たし白の身よ余るといふ人よよよと
云ぬ世との若の龍年とて増開とて又意地とて
まふよしとて毎つとて冬とてやとて人の人
よねとおの若よつとてやね年遊遊の妙なり道
理とて年ぬよよりとてをく之毒とて招とてく自
悪なるよとてむく痛くといふ事とてけりてかひぬく今
よりとてたれ風神とてといふおとといふ人
あしとていしとて老のの之資とも人よとて高
とあせにたままよといふとてふとてふとて若
おんがり人よといふとてあくせとてせとてあく
よ一白とていしとていしとていしとていしとて
會よといふとてぬとてせとてけりよといふとて
かまひすといふとてけりやとていしとていし
しとて有て定て月花の白若といふて定て定て

せと亦重有く一と也也清わりの自由なるは
成りては一と也也一と也也及りた付の
と反かき一と也也一と也也一と也也一と也也
白と必がく一と也也一と也也一と也也一と也也
えりて一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也
乃と一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也
然楽と一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也
海を一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也
あ一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也

白教と一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也
りて人よ一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也
く一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也
と一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也
後立一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也
御借一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也
味一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也
祈禱一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也
ま一と也也一と也也一と也也一と也也一と也也

八白のくろく一系くびくろくくろく 勢以次、神祇大星
布代系、大教よを極くくろく又系共、出ぬふくろく
武藏と面露、くろく大教よくろく人倫よ極くくろく
くろく人倫よくろくくろく同井淨妙、常陸坊か、くろく
くろく多、くろく武藏とくろくくろく西塔の武藏
坊と名系、くろく大教よくろくくろく人倫よ極くくろく
勢至文殊、普賢、東の大士、或、聲、言、極、定、或、極、漢
達、成、大、師、國、師、或、法、家、の、開、山、本、の、名、僧、も、僧、也、
事、く、每、慶、正、寺、の、や、く、く、凡、僧、の、皆、人、倫、よ、く、
又、名、を、く、く、く、僧、と、曰、志、以、丘、尼、以、丘、和、為、東、堂、西
堂、上、人、の、圓、梨、出、家、大、德、法、師、座、主、の、臨、僧、正
傍、邪、法、中、法、指、沙、の、淨、侶、是、未、の、僧、と、曰、く、く、
人、倫、よ、く、く、く、優、婆、塞、優、婆、夷、沙、
山、伏、小、僧、新、奈、智、首、座、主、の、維、那、行、梵、唱、食
入、道、指、束、法、師、納、下、書、記、執、り、貝、代、老、岩、法、師、經、
以、丘、尼、ヶ、名、よ、く、僧、の、よ、く、大、教、よ、く、人、倫、よ、く、成、く、
但、は、内、外、の、名、人、倫、よ、く、く、く、子、よ、く、く、

くらくし事も有るゝあふの奇り
ゆやうの海々々川郭云今一勢のさ海引ま
よめ新と想あよ

かしくしけ星とよ町をこちのうけきし結ん
結くちよあふ堂もをて面白き道に海階也和
あよ新奇のあふあふくし奇のあふよはるとし
くふ下口のくをさされ西の月穴の月を西の
後とて深ゆむの理けく青の海階のうもと紙
若花月くあふよて十とらわれ月をよあひを

今この岡古きくみ夜合せととと國作然
月の字さくあふのあふもあふも西の月よりり
る月晴月を月かあふよむ事之但今まて先
連のゆはとと続し事あふとくはとさく人の
下知まゆあふとと又平より内老の白せぬよの奇
まし奇よ通く有事くを理と尋ぬとて別の
あふあふひあふより老くくの礼く老は迷儀の
よのうらよよりあふも連奇よよも表よ出く
んを伴らあふとと井堂推よあふあふのあふ

又してと云ていてゐるやうに候こそと云ふ文字は有る
下十二字の中下に文字ありとてゐる

花とては極一なる處にありて

又と云の——とてゐるやうに候とては——とてゐる

若。山原——原とては——音とせし

雲。星を——はもてせぬ母とて

一トの句てゐるやうに字あり候

はる流しの氷を氷とて

一にとるのりかゝては——とては——とては——

あふとに後とては——とては——

こゝろとては——とては——とては——

旭とて起とては——とては——

一トの句は——とては——とては——

旁にとては——とては——

一トの句ト急の事——とては——

いとけ人——とては——

是とては——とては——

六のら人——とては——

一自のらとては——とては——

喰ふもく適中此術を傳へるは其の末に
若く急切に朋友少く及ぶ清くふるは
感しとて折言紙もやうな事とて不及回諱師
よりお徳の旨胸中とはけい然とせよ自筆を
云月判の云ある系代流本よりおる事とて
急切に申し扱を血りしてゐる者お徳又と未だ
板のせうやう堅くはしる方端板を
いふとくは清く又はたはれりあゆま
いふとくは清く又はたはれりあゆま
いふとくは清く又はたはれりあゆま
いふとくは清く又はたはれりあゆま

いふとくは清く又はたはれりあゆま

愚作なりは是れ少く喜ぶを安の正顔の身あり
幸ふなり人あり

維時明曆元し末霜月在旨
富永氏
燕石子在判

綱屋貞因雅丈
系

そのうと並み未だ平山其を推し進めし
進し西河とふ白くして南流より平山白付

付をりしは事ありきやわ奇向しんは
後成に定家への流落多し候へども尼がしは款
と曰し申外し候ふ如法師宗紙師宗長師の
流落も名白は山寺にまゝ又は聞及ひゆべ
まゝとて流落の一居にあり申す候ふ事
このまゝ師の人も已落のばはなまあり
しりまゝ奇れ振成をしまゝしりまゝ
すは世との人流落師に知れし人等忠内也
おしりしに事なく師の御由とすもの奇
とてしりしに事なく師の御由とすもの奇
とてしりしに事なく師の御由とすもの奇
末世の事を教とて人のせぬ事ありしに
やま有ん事なくし流落義ありとす
直し流落を真に千葉の流落を流落
し流落も少奇もまゝ事ありしに
ゆく事あるの事ありしに
まゝとてしりしに事なく師の御由とすもの奇
奇めしりしに事なく師の御由とすもの奇

有是を知らざるは終る旅よりしは骨とよ今傳れ
又十條の大秘書有凡々常生の亡父永隆に由
相承ふ書は法師の出家子に伝はる法師に里村昌保の
門人之出家弟子云も字を以て法師の遺言に由
ありお徳の師はかつらとては法師に由り出
たれとて下の遺言大事井もかつらとては今と
名存の人多しとて

一 十句の教句題之ひ牙

兼卷頭教句題の白紙に
下知り抄ひし

卷一の卷

梅、雪、花、鳥、是亦也奇句

卷二の卷

花、鳥、柳、是亦也又柳

卷三の卷

花、鳥、柳、是亦也有

一 春句三句夏句二句等句 初涼句三句秋の句
三句之内秋月兼、冬、春、雪、氷、雨、風、日、月、
鈴、大、小、竹、の、く、用、か、を、さ、り、又、花、汁、の、教、句、兼
月、中、秋、月、の、句、少、く、中、句、も、有、る、是、旅、中、に
あ、り、及、つ、と、花、の、句、少、か、つ、て、奇、句、の、く
あ、り、は、ま、嫌、お、遠、有、く、権、筆、に、承、お、徳、と、法、師、
より、ま、ふ、く、法、師、の、く、一、は、是、旅、に、九、人、士、二、人、

一教白大まりの袖の結ぶ結一
のゆく

大まりの教白古人の妙白

安谷の春目のゆく玉津

墨の袖のゆく川

大まりの物と春れ

大の春の結ぶ結一
のゆく

八月雨の春風の谷の水

花のゆく極の結ぶ結一

新のゆく春の結ぶ結一

雲のゆく秋の結ぶ結一

海出のゆく月の結ぶ結一

花のゆく春の結ぶ結一

あやのゆく春の結ぶ結一

下茶の結ぶ結一

新のゆく春の結ぶ結一

春のゆく春の結ぶ結一

春のゆく春の結ぶ結一

春のゆく春の結ぶ結一

月の夜のおく格のじつ河内

くろの字の口結

名せしむるさり子種やせつらん

右一代一句く

ロ—の字の口結

秀吉公出陣公へお不申の因えくを御侍とせうんせ
お也申—にありひわら申—く—の格合いなり—と—

一もす— 一もくま 一かぬ

三月とよ格口結

眼よとりのたま

今夜のまわりひゆきありとく 影をゆきまよわぬ
一代よ—及び又ま入る位は不慮よ及く是れ
まゝ時人のまろぬや—ます—かゝるおぢ
して知るお世も—と—く—も人後申—
申すやゆきの隣人—も—を—りて—
りやう—と—い—わ—と—師近海生肉を
む—と—ち—と—思—く—大切の骨子た
く—と—師近よ—理—く—ひ—面—の—
—と—隣人す—と—と—も—海家の秘を隣

第三十種有口傳

花の袖の文字にまきわれし上の文字類の文字
梅の衣はまきわれし上の文字類の文字
梅の衣はまきわれし上の文字類の文字

一千句 教句 服着之 各付し事

- 一 ^{茶白} 服
- 二 ^師 人
- 三 ^十 人
- 四 ^六 人
- 五 ^九 人
- 六 ^八 人
- 七 ^十 人
- 八 ^九 人
- 九 ^十 人
- 十 ^八 人

- 三 ^七 人
- 四 ^九 人
- 五 ^八 人
- 六 ^三 人
- 七 ^二 人
- 八 ^八 人
- 九 ^四 人
- 十 ^一 人
- 十一 ^二 人
- 十二 ^三 人
- 十三 ^四 人
- 十四 ^五 人
- 十五 ^六 人
- 十六 ^七 人
- 十七 ^八 人
- 十八 ^九 人
- 十九 ^十 人
- 二十 ^{十一} 人

右頭の一ニ作共の名

一 四句月并八句目のありし事又字を書すとて

一 花よ橋と付し事加せぬの花の時世一と云の花は草木花
草木と橋は河に入らざる事一は

一 梅枕藤よよむの身根無くありけりて

一 五名のよよむ名ののりけりて死

一 名もよよむ名の事程有る言但名入ははれり

一 夜の香を履櫃木の口付月の字必入くて用し

一 程の字并河原ぼくのてよとて冷形雲の事

程河原の河は昔河原といふ又ぼくの事けりて
つと云又程の事とちやく結さるる

四句の浦よりいふてんてはゆのりとのよよむはやうに
はるきふかしく

一 伏の向よ花の身根履と香ありてるん
履紅糸に他はれは

一 花も香と一りよ花よ白情深山色も少く香のまゝ

一 月花の一句は五花をよむの二この折少く師よ花を

よ中ずかちく又別れれは門人の行ある事一は

存よふ香とつきのは根
今世は是昔世をす
ん世をす

一 数句よよむとあり又程よよむ知りしの河にこ

てよ合ふとれとの字ありてすり改く数句よ

よい字よよむ必す月の名くけはいとあき

おやまう今時の遊法師知るやかき流丸
の口入るう一秘す一審す一

口入るよあうひのま

一後句うとくひうらまき一あはれはひる方句あす

一しとあう又と知るのてし一あすあすあ

うらまはし一しあ

服分よあすあまあま一あ一のあひ

又平句よあう一あ

一車てよとまておとしうらあはあはあ

一巻の教句うらも顔の字余うせああ

又遊告うら一一句の中はあうも字余ああ

一歌の懐帯終しくはうと上方よああ紙と押

是もを代唯あはの紙と用こしああ

懐杯ハ年ハてま二条及六條のあうあわり

先二条あま二条とああ一紙よあ書

うらうとすあうあ字と出又あああ

えりうと古ハ一字あああ

付く書く詠の歌の間に一寸く詠う一字けり
 引さけて詠も習り一々此方と詠の字を回し
 以て本歌と云ふ又一寸隔り一々此方と詠
 詠よりるは曲くして中有宿の人、宿名又無宿
 の人、姓名として書信の名、思ひ名、姓名、女房
 を名中へ入又祝言よめぬとて一行と云ふ言
 の奇なりとも四字詠歌、奇とてその方めはけ一
 首の奇、二その方の、一紙、ままたりてとて
 必一その、一その、一字、その、その、その、その、
 と下二行、その書、その名、その人、一、一、
 名と書、よ、あ、名、よ、よ、一、下、一、紙、の、下、
 ば、め、て、書、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
 二、二、二、二、二、二、二、二、二、二、二、二、二、二、二、

詠 二首 和歌

小夜ちりりねとてしやまや
 小夜ちりりねとてしやまや
 小夜ちりりねとてしやまや

一 小色紙 堅 三寸六歩 三百半目と長 横 寸五分 口他

又 中紙 大 二寸六の中と寸五分 大と半 堅 寸五分 横 寸五分

一 大経冊 堅 寸五分と跡 寸五分と寸五分 横 寸五分

八分と又寸五分と寸五分

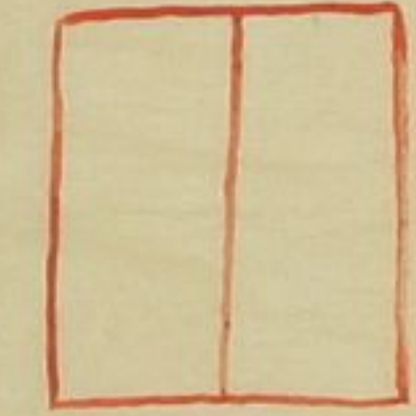
一 小経冊 堅 寸五分と寸五分 横 九分

大 寸五分と寸五分の寸五分と寸五分と寸五分

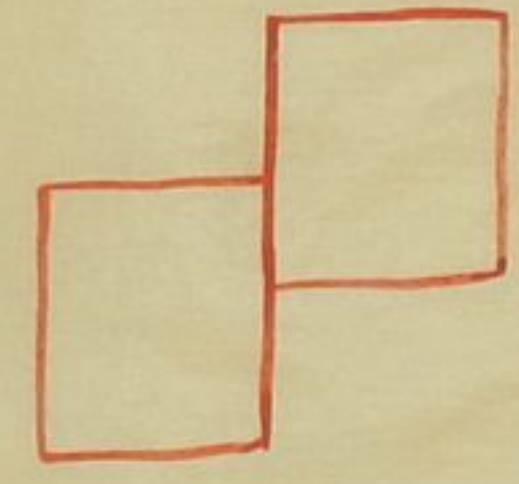
色紙 経冊 亦 尺 風

一 長 半角 半角長 角長 半 寸五分と寸五分 大 初 七 分

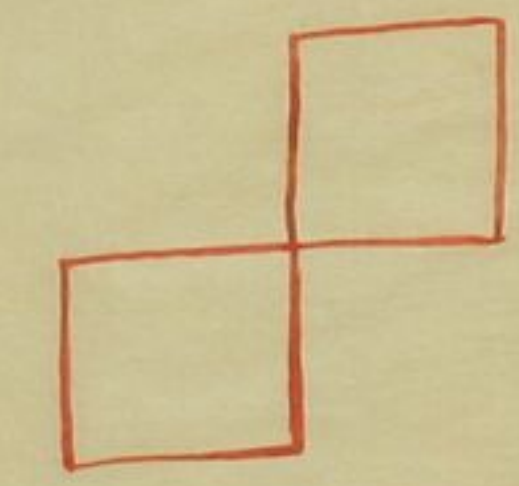
長



半



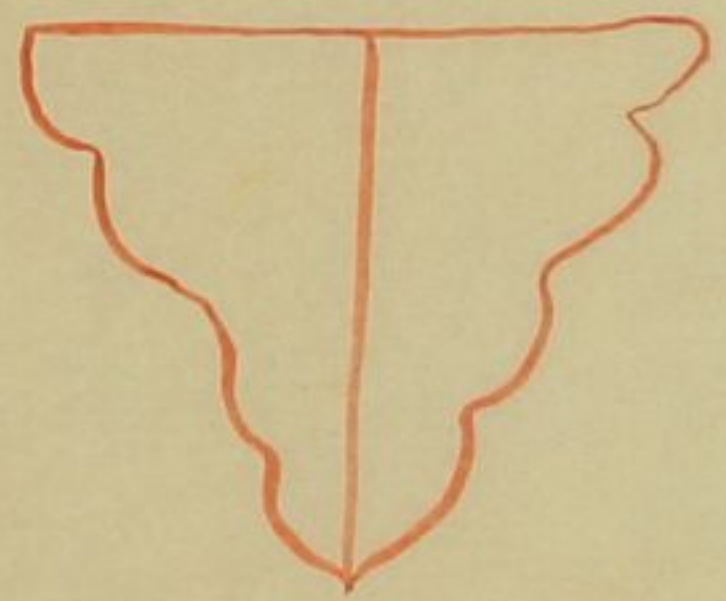
角



是 尚 亦 秘 傳 也

堅 寸 五分 寸 五分 横 寸 五分 寸 五分

文 臺 寸 法



板ノ厚サ 三分半 是ノ長サ 寸五分 是ノ寸サ 寸五分

右ノ寸法 寸五分 寸五分 寸五分 寸五分 寸五分 寸五分

太僕之秘書一處之奧內之秘之少以
いのみ山へ一穴あり

此一卷者老師長頭翁之奧藏也奉世爭我
他逼此老師遂輯此道之至要名曰天水蓋便
其滓消融也予雖不敏遊其門下師事之十
是有年矣一日進曰原許一卷為守教也以誓
約老師不得心許之予受之喜甚於是步而
懷之也今予慕風雅志高於山川之需深於
海而盤詞及數條予感其志而無天地點
止故客之庶幾穿窬乎請全歸之而守
約矣敬哉子政之與富永氏燕石子

雞冠井九郎右衛門尉

千時年号月日同上卷

良德在判

大哉至哉政之語世之綱領也受之或
法言僕員而志大切也是則雞冠井氏
來福子之伴也予守之而不離身披之

水家名をく大をくく列以源深淵味味奇
哉斯謂言源於水少海惜隱心自毫書
之以司判加之而校正安之肯家女令久
許拂飯中平 仍若身室之深者不其
朋蔑之隆為尾碑不取教和奇


乙水と何ぞ也此言のよしの用ひを
うらまへん

呵々為く程程を帝之孫侍授し法武英志
失儀而秘之敬而密之云々

富永治庸門尉

九千餘年
以上古書列

千時年号日日月々々

燕石 在判


又右方ハキ
燕石と云判有

綱目

元九高反

寺井

右之一卷經牙身不持之所
文基之寸法亦尋儀之六一卷
之免写

延享四丁卯年正月申勿写之年

正木風伏 五



